

Title	大英博物館蔵『浦しま』解題・翻刻付図版
Sub Title	
Author	辻, 英子(Tsuji, Eiko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2003
Jtitle	三田國文 No.37 (2003. 3) ,p.16- 30
JaLC DOI	10.14991/002.20030300-0016
Abstract	
Notes	図削除
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20030300-0016">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20030300-0016</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 大英博物館蔵『浦しま』解題・翻刻付図版

辻 英子

成稿にあたっては、大英博物館 (The British Museum) 蔵

『浦しま』の観覧の機会を得、二〇〇二年八月七日付で翻刻掲載許可をいただいた。また、同館の Dr. Timothy Clark (Assistant Keeper, Japanese Antiquities) をはじめ、Sally Morton 氏、David Penn 氏、Paul Martin 氏には大変お世話になった。はじめに記して厚くお礼を申しあげる。

江戸時代初期 写絵巻。一卷。縦三一・七×全長九四一・二糎。一卷。所蔵番号 Jp.301。藍色地に菊花や唐草の模様を織り出した金襴表紙、見返しは金紙、紫色の平打紐がついている。題簽は朱地・短冊形の紙に「浦しま」と墨書し、表紙の左上に貼る。牙軸。料紙は金泥霞に四季花本草花の下絵の入る上質の鳥の子。全二一紙、絵は五図。錯簡はなく善本である。桐素箱入り、中央に「御巻物浦嶋之繪」と墨書する。

本書に注目した動機は、同時に調査した『伊吹とうし』絵巻一卷 (Jp.2877) とともに朝倉重賢の筆に極めてよく似ているからであった。『浦しま』については、林晃平氏著『浦島伝説の研究』に「朝倉重賢筆 (石川透氏の筆者分類を適用) (おうふう平成十三年 一三〇頁) としている。『伊吹とうし』については、

別稿で述べる。

## 一

「浦しま」は御伽草子としてもっとも有名な作品の一つである。縁起式怪婚譚で、『万葉集』・『丹後風土記』「浦嶋子伝」等で知られた古伝説の御伽草子化である。伝本も多いが、大英博物館蔵本はこれまで翻刻はなく、諸伝本に照らしてどのような位置を占めるのかについてははっきりしなかったが、それらを考察していくのが本稿の目的である。本書の存在については、松本隆信氏によって、「増室町時代物語類現存本簡明目録」(『御伽草子の世界』所収 昭和57年 三省堂) の中(六六頁)に報告されおり、伝本系統については五分類をされている。それに対して、若干の修正を加えた四分類が林晃平氏によって発表された(『浦嶋伝説の資料と解題・稿』「苦小牧駒沢短期大学紀要」第21号 平成1・3)。その説は、近年刊行された古典文庫『奈良絵本集・パリ本』(小杉恵子/ジャックリーヌ・ピジョー編 古典文庫第五八二冊 平成七年五月) 解題で「もっとも適当」とされ、松浪久子氏の「作品論『浦島太郎』」(『解釈と鑑賞』一九

九六・五)でも「大別して四系統の本文がある」(前掲書『浦島伝説の研究』一二〇頁)とされている。その四分類については、林氏が前掲書で詳しく述べられており(一三〇～一三五頁)、大英博物館蔵本を「流布本と考えられるIV類系統」の「二」のその他奈良絵本写本類(未詳)。(前掲書一三五頁)に数えている。伝本研究としては、横山重編輯『室町時代物語集第五』(井上書房 昭和三七年)を承けて、松本隆信氏の『中世における本地物の研究』(汲古書院 一九九六年)の「浦島太郎」の項に詳しい。それらに負って大英博本(以下、略称を用いる)を検証した結果、私も「IV類系統」に属する、と考えている。林氏の分類の中から、今回検証の対象として採りあげた作品に関する項目を抽出すると、次のとおりである。

#### I類

イ 日本民藝館蔵(A本)〔室町後期〕絵巻前半欠 一巻

〔室町時代物語大成第二60〕所収。

ロ 高安六郎氏旧蔵〔寛文前後〕奈良絵本特大 一冊

横山重編輯『室町時代物語集第五・百十八』(戦災焼失?)

ハ フランス国立図書館蔵 絵巻 一巻 古典文庫五八二

#### II

日本民藝館蔵(B本)〔室町末〕絵巻 一巻(大成二61)

#### III

古梓堂文庫旧蔵〔江戸初〕絵巻 一巻(室物五・百十六)

#### IV

イII「あかしくらし」ナシ

A写本・絵入本・絵巻

赤木文庫 絵巻 一巻 (大成二62)〔斯道文庫マ

A768W〕

E 禿氏祐祥旧蔵〔近世中期〕胡蝶装写本 一冊(室物五・

百十七)

ロII「あかしくらし」の付加

B 御伽文庫本 三十九冊本 外題「うらしま太郎」一冊

C 二十三冊本 外題「浦島太郎 廿一」一冊

ニ その他奈良絵本写本類(未詳)

大英博 絵巻 一巻

大英博物館本との対比にあたって、近似性が見られる赤木文庫本・御伽草子(板本)・禿氏祐祥旧蔵本の三本を取り上げた。禿氏祐祥旧蔵本について、松本隆信氏は、「古絵巻(前掲林分類の「I類イ」・「II」に当る)よりは叙述が丁寧であり、本書は時代の下った写本で、本文は寛永ごろの丹緑本や流布の御伽草子本に近い。しかし、それらの刊本の本文よりも委細なところが多く、文章もよく整っていて、刊本を写したとは思われない。刊本系に先立つ古い形を伝えた本であるかもしれない」(『中世における本地物の研究』四三六頁)と推定されている。刊本としては、校注・訳者 大島建彦『御伽草子集』(日本古典文学全集36 小学館 昭和五九〔初版昭和四九〕年。市古貞次博士所蔵の板本を底本とする)を使用する。大英博本の異同部分を「網掛け」で示し、続いてカッコ内に、異なる場合に限り「赤」・「板」・「禿」を記し、三者共通の場合は、赤本の表記で代表させる。

大英博物館蔵本 (赤本・板本・禿本)

・いてにける (り) さて (ナシ) 浦く (第1紙7行)

・このありさまを見て あら なにともなや (ナシ) かめにむかひていふやう (1・12)

・よはひ (いのち) 久しき：今 (ナシ) たちまち：いのちをたゝんことの (ナシ) むさんさま はや (痛はしければ) (?・158)

・つりをせんとおもひてうみつらを (ナシ) はるかにかいしやうをみわたせば (見ければ、かの海上に)：あやしくおもひてみるところに (怪しみやすらひ見れば) うつくしき女房の

(ナシ)：御身いかなる人なれば (にて坐せば) トアリ

女しやうの身として (ナシ)：ふねに (ナシ) のりておはしまし (御入り) 候やらんと：かの女しやう (女はう) いひけるは：ひんせん申てふねにのりければ (候へば)：はなたれまいらせて (赤・板「はなされけり」。禿「はなされ候なり」)：たゝ今人 (同、赤・板。禿「御身に」トアリ) にあひ (次

ニ、赤・板「まいらせさふらふ」。禿「さふらふ事」トアリ) (4・3517)

・御えんにてこそ侍らんつれ (候へ) されはとらふす野へにはおそろしき (ナシ) とらおほかみもひとをえんと (こ) アリ) そしさふらへ (6・2512)

・浦人 (島) 太郎：さて女房のいひ (申し) けるは あはれ我ら (同、赤・板。禿「みつから」) をほんこくへをくりつけて

(赤・板「送らせ給ひて」。禿「をくりて」トアリ) たひたまへ (ナシ) 候へかし これにて捨られまいらせて (ナシ) はわらは、いつくへやゆかん (ナシ) 何と成さふらふへきこゝにて (ナシ) すて給 (ひ候) アリ) は、あはれとおもひて (ナシ)：ふる郷へ (ナシ) そつきにけれ (る)：いかならん (る) 天しやうの住居も：此女房のすみところは (ナシ) (8・1519)

・ひとへにたしやうのき (ナシ) えんなれば (同、赤・板。禿「縁そかし」)：おなじところにて (同、赤・禿。板、ナシ)：いとむつましく (赤・板「こまくと」。禿「しほくと」) かたりけり (る) (9・659)

・あるとき (さて) 女はう申しけるは (同、赤・板。禿「女はうきいて、そもそも」トアリ)：四季のていをあらはし (ナシ) さうもくをうへたり (現せり) いさゝせ給へ (赤・板「いらせ給へ」。禿ナシ) みせ申さんとて 二人もろともに出けり (引具して出でにけり)：柳のいと (も) 春風にみたれて (ナシ)：のきちかく聞ゆ (ナシ) (10・5515)

・夏とや (同、赤・板「は」。禿「を」トアリ) いらせけん (知らせけり)：にしは秋か (ナシ) とうちみえて 四方の木すゑも (同、禿。ナシ赤・板) もみちして：きり立ちこむ (同、禿。赤・板「も」) る野へのすゑ 真萩か露をわけ：冬のけしきもおり (と打ち) みえて：かれ葉に置るはつ霜の (や) 山くくや たゝ白たへの雪にむもるゝ谷の戸に：すみかまの (ナシ) 煙にしるきしつかわさは (ナシ)：かくておもしろき事もをみて (に) こゝろをなくさ (同赤・禿。「め」

板) 栄華にほこり(下二統イテ、板「明し暮し」トアリ。赤・禿ナシ) いつとなく(ナシ)とし月をふるま(程)にふるさとをわすれ(ナシ)：かゝるところに(ナシ)(11・5く20)

・うらしま太郎 かの女はうにいひけるは(ナシ)：たひ給へ

いとかりそめに立出て(候へかし)：かりそめとは申せども

(に出でて) はや(ナシ)：いそぎ行て(ナシ) あひたてまつり(て)アリ)：まいる侍らん(候はん)と申すれば(申しければ)

女房のたまひけるやうは(赤・板「おほせけるは」) 禿「申やう」：まことに(ナシ) えんあふのふすま

のしたにして(ナシ)：とやせん(あらん)：今 又(ナシ) わかれ たてまつりては(なば)：ふうふは(ナシ) 二世の

えんと：来世にてはかならず(必ず来世にては)：女はうのいひ(申し) けるは：かりに人けんとなり(ナシ)：夫婦と

(「は」アリ)なりまいらせしことこそはつかしけれ ざりながら(赤「せて候 又」)板「うして候ふ、また」。(禿「うせて候そや、また」トアリ)これは(「自らが」アリ)かたみに

：ひたりのわきより (赤・禿「うつくしき」、板「いつくしき」トアリ)はこを：これを御身にまいらす(ナシ)あひ

かまへて(「(ナシ)：(赤・板・禿「えしやちやうりのならひとて」トアリ) あふものは：うら嶋 返哥に(赤・板ナシ。禿「かへし」)：(「さて」トアリ) うら嶋太郎も(は)たかひに：かたみのもの(赤「箱」、板「篋」。禿「はこ」)を(12・1く19)

・日かすへてかさねし夜半のたひ衣(禿「からころも」トアリ)：行すゑのことともを(ナシ) おもひつゝけてはるかのなみ

しをかへる(赤「ゆく」、板「帰る」。禿「かへる」)とて：とかくして(赤・板ナシ。禿「それより」トアリ) 故郷(禿「たんこのくにへ」トアリ)へかへりてみれば(見てあれば)：うら嶋かしこを(これを)見て こはいか成ことやらんと

おもひ(同赤・禿。板「思ひける」トアリ) みるかたはら

みれば(赤同。板「ある」ナシ。禿「あきれはてたるはかりなり」トアリ)：立より(赤・禿「たちより」、板「たち」)：うちより(禿、次二「も」アリ) 八十(禿「も」とせはかりの「トアリ) はかりのおきな出て(赤・板、次二「あひ

トアリ。禿、英二同ジ)うらしまの行ゑはしるしめさぬ(候はぬか)：いかなる人にてましませば(禿「ましませば」。赤・板「候へは」トアリ)：はや七百年いせんのこと、申つたへ

て(赤・板・禿ナシ)候(14・1く14)

・こはいかなることとて あぎれてそゐたりける しはしありてうらしま(赤・板「いかにとおもひて、そのいはれを」。禿「いかなる事やらん、わかみなからも、ふしきなりとて、はしめおほりを」トアリ) ありのままにかたりければおき

(「も」ノ字アリ) きひて(ナシ)：申けるやう(ナシ)は：あれに見えて候 すこしたかきところ(板「古き塚」、赤「ふるつか」。禿ナシ)こそつかなれ それに ふるきせきたうのみえけるは(ナシ)「こそ」アリ)その人のひやうしよ(赤「ひやう所」、板「廟所」。禿「あと」)のしるし(赤・板ナシ。禿アリ)とこそ(赤・板・禿ナシ)申つたへて(次二、赤・板「こそ」ノ字アリ。禿「て」ナシ)さふらへとて：そのつか

にむかひ(赤・板「ふるきつかにまいり」。禿「ふるつかのま

へに、かしこまり」トアリ) なみたをなかしてかくそつらねける(赤・板「かくなん」。禿「申やう」トアリ)(16・11~14) あけて見はよと思ひて(ナシ) : ふしきやな(ナシ) 中よりむらさきの雲三筋のほりけり 是を見て(れば) たちまち十五の(二十四五の) よはひも(禿「も」ナシ。赤・板、次ニ「たちまちに」トアリ) かはり果てにけり(る)(17・2~6) とかくして(さて) 浦嶋太郎は : とひのほりけるこそふしきなれ(ナシ) そもく(赤・板アリ。禿ナシ) このうらしまかとしを : 七百年のよはひをたもちに(ナシ) けり(ける) さしも(ナシ) あけてみるなとかめかをしへけるに(ありしを) あけてみる(「にける」) こそ くらしけれ うらしま(よしなけれ) : 二世の契と申けるは(赤・板「申か、誠に」。禿「申事、まことなるかな」トアリ) ありかたき事共なり(かな) : うち嶋太郎(赤「うらしま太郎」、板「うら島」。禿「うらしま」) は鶴になりて(ナシ) 蓬萊の山にあひをなし(赤・板「なす」。禿「ほうらいにあそひければ」 : 三石の山は(禿「板「三せきのいわゐ」、赤「三せきのいわひ」。禿「三きよく」トアリ) をそなへ(19・1~18)

つるかめをこそ申なれ(赤・板「申候へ」。禿「つるかめを、いはふとかや」トアリ) : なさけ(赤・板「の」アリ。禿、対応語ナシ) なさけある人は行すゑめてたきよしを(ナシ) 申つたへたり(禿コノ句ナシ)(21・1~4)

### 三

右の結果を整理すると、次のようになる。( ) は「いわゐ」

「いわひ」のような表記の異同を示す。

一 赤・板・禿本が共通で大英博本に合わない場合 109例。

例 よはひ(赤「いのち」・板「命」・禿「いのち」) ひさしき (2・2)

二 大英博本は赤・板・禿本に合わず、しかも赤・板が共通する場合。16・(1)例

例 いとむつましく(赤「こまく」と)・板「こまごまと」。  
禿「しほくと」 (9・9)

三 英・赤・板本が共通で、禿本が異なる場合 9例

例 かさねし夜半のたひ衣(赤「かさねし夜半の旅衣」。板「重ねし夜半の旅衣」。禿「かさねし夜半のからころも」) (13・12)

四 英・赤・禿本が共通で、板本が異なる場合 5・(1)例

例 栄華にほこり(赤「栄花にほこり」。板「栄華に誇り明し暮し。禿「ゑいくわにほこり」) (11・18)

五 その他

こう見てくると、大英博物館蔵本は、右の「四」の例からも林氏分類の「IV イII「あかしくらし」ナシ」写本。絵入本・絵巻」系統に該当し、五首の和歌も一致する点から、大筋では赤木文庫本に近いと言える。ただし語句に異同のあることは、すでに見てきたとおりである。同分類の「IV E」に数えられる禿氏祐祥旧蔵本は、流布の御伽草子の本文に近い本文をもつものの、和歌五首中一首に異同が認められる(前掲「三」項参照)ほか、詞章の叙述は委細を極める。また板本は、同分類の「IV

ロII「あかしくらし」付加」に属す。

以上のことから少なくとも大英博物館本は板本を写したものと考えられない。誤脱と見られる箇所もあるが、赤木文庫蔵本・禿氏祐祥旧蔵本とともに、版本系に先立つものかもしれない。また、大英博物館蔵本「第5紙」はわずか五・五糎である。白紙のままなのに継いだ理由があるのだろうか。大英博物館蔵本「たゝ今人にあひ」(4・19)と「この世ならぬ御えんにてこそ」(6・154)との間に、三本ともに「まいらせさひらふ」とあるところを見ると、写し落した句を補筆すべく紙継ぎをしたままに終わったのかもしれない。

大英博物館蔵「浦しま」詞書

むかしたんこのくに、浦嶋といふもの  
侍りしに、その子にうら嶋太郎と申て  
としのよはひ二十四五のおのこあり  
けり、明暮うみのうろくつをととりて  
ちゝはゝをやしなひけるか、ある日のつれ  
／＼にうらに出て釣をせんとていて  
にける、さて浦／＼しま／＼いりえ／＼  
いたらぬところもなくつりをし、かひを  
ひろひ、みるめをかりなとしけるところ  
に、えしまかいそと申ところにて、亀  
をひとつりあける、うらしま太郎  
このありさまを見て、あら、なにともなや  
かめにむかひていふやう、なんち、しや  
うあるものゝ中にも、鶴は千年亀は  
万年とて(第1紙)

よはひ久しき

ものなり

今たちまち

こゝにて

いのちを

たゝん

ことの

むさんさよ

はやたすく

る

なり

つねにこのおんを

おもひいたすへ

しとて

此かめをは

もとの

うみにそ

はなし

ける(第2紙)

(絵一)(第3紙)

かくて うらしま太郎 その日はくれて

かへりぬ 又つきの日 うらのかたへいて、

つりをせんとおもひてうみつらをはる

かにかいしやうをみわたせは せうせん

一そううかへり あやしくおもひてみる

ところに うつくしき女房のたゝひとり

浪にゆられて したいに太郎か立たる

ところへつきにけり 浦嶋太郎か申けるは

御身いかなる人なれば 女しやうの身と

して かゝるおそろしき海上にたゝ一

人 ふねにのりておはしまし候やらんと

申ければ かの女しやういひけるは されは

さるかたへ ひんせん申てふねにのりけ

れは おりふし波風あらくして 人あ

またうみの中へはねいれられしを 心

ある人のありて身つからをは このはし

ふねにのせて はなたれまいらせて かな

しくおもひ おにのしまへやゆかんと 行

かたしらぬおりふし たゝ今人にあひ(第4紙)

この世ならぬ

(第5紙)

御えん

にて

こそ

侍らんつれ

されは

とらふす

野へには

おそろしき

とらおほかみも

人をえんとそ

しさふらへ

とて

さめくと

なきに

けり(第6紙)

〔絵二〕(第7紙)

浦人太郎(うらひと)もさすかいは木にあらされは

あはれとおもひ つなをとりて引よせに

けり さて女房のいひけるは あはれ我ら

をほんこくへをくりつけてたひたまへ

候へかし これにて捨られまいらせては

わらはゝ いくへやゆかん 何と成さふらふへき

こゝにてすて給はゝ かいしやうにてのもの

おもひも おなし事にてこそ候はめと

かきくとき さめくとなきければ うら

しま太郎も あはれとおもひて おな

しふねにのり おきのかたへこきいたす

かの女房のをしへにしたかひて はるか

十日あまりの ふなちをゝくり ふる郷へ

こそつきにけれ さて舟よりあかり いか

なるところやらんと思へは しろかねのつ

るちをつき こかねのいらかをならへ 門

をたて いかならん天しやうの住居も

これにはいかてまさるへき 此女房のすみ

ところは 言葉にもよはれず 中く(第8紙)

申もをろかなり さて女房の申けるは

一しゆのかけにやとり一河のなかれを

くむ事も みなこれたしやうのえんそ

かし ましてやはるかのなみちを はる

くくとをくらせ給ふ事 ひとへにたし

やうのきえんなれば 何かはくるしかるへき

わらはとふうふのちきりをなし給ひて

おなしところにて あかしくらしさふら

はんやといとむつまじくかたりけり 浦

嶋太郎申けるは ともかくも おほせに

したかふへしとそ申ける(第9紙)

さて かひらうとうけつのかたらひも

あさからす てんにあらはひよくのとり

地にあらは れんりのえたとならんと

たかひにあうちやくのちきりを浅から

すして あかしくらせ給ふに あるとき

女はう申けるは これはりう宮しやう

と申ところなりと このところに四方に

四季のていをあらはし さうもくをうへ

たり いさゝせ給へ みせ申さんとして 二人

もろともに立出けり まつひかしの

戸をあけてみせければ 春のけしき

とおほえて 梅やさくららの咲きみたれ

柳のいと春風に みたれて なひ

くかすみのひまよりも うくひすの音

ものきちかく聞ゆ いつれの木すゑも

花なれや みなみおもてを見てあれは

なつのけしきとうちみえて 春をへ

たつるかきほには 卯の花やまつ咲

ぬらん いけのはちすは露かけて みきは(第10紙)

涼しきさゝなみに 水鳥あまたあそ  
ひけり 木ゝのこすゑもしけりつゝ 空に  
なきぬるせみのこゑ ゆふたちすくる  
雲間より こゑたてとをるほとゝぎす  
なきて 夏とやしらせけん にしは秋か  
とうちみえて 四方の木すゑもみち  
して ませのうちなる白菊や きり立  
こむる野へのすゑ 真萩か露をわけ  
くゝて こゑものすこき 鹿の音に 焮と  
のみこそしられけれ さて又きたをな  
かむれは 冬のけしきもおりみえて 四  
方のこすゑも冬かれて かれ葉に置く  
はつ霜の山くゝや たゝ白たへの雪に  
むもるゝ谷の戸に こゝろほそくもすみか  
まのしたの煙にしろきしつかわさは  
冬としらするけしきかな かくておもし  
ろき事ともをみて こゝろをなくさみ  
栄華にほこりいつとなくとし月をふる  
まゝに ふるさとをわすれ 三とせに  
なるはほともなし かゝるところに うらしま  
太郎 かの女はうにいひけるは われに 三十  
日のいとまをたひ給へ いたりそめに  
立出て ふる郷の父はゝを見捨て かり  
そめとは申せとも はや三とせをゝくり  
候へは ちゝ母の御事こゝろもとなく候へは

(第11紙)

いそぎ行てあひたてまつり 心やすく  
まいり侍らんと申すれば 女房のたまひ  
けるやうは 三とせかほとは まことにえん  
あふのふすまのしたにして ひよくの  
契りをなし かたときみえさせ給はぬさへ  
とやせん かくやあらんと こゝろをつくし  
申せしに 今又わかれたてまつりては  
いつの世にかはあひまいらせさふらはん  
や ふうふは二世のえんと申せは たとひ  
この世にてこそ 夢まほろしのちきり  
にてさふらふとも 来世にてはかならず  
ひとつはちすのえんとむまれさせおはし  
ませとて さめくゝとなき給ひけり 又  
女はうのいひけるは 今は何をか つゝみ  
さふらふへき みつからはこのりう宮しや (第12紙)  
うの亀にて候か 江嶋かいそにて御身に  
いのちをたすけられまいらせて候 そ  
の御おんはうし申さんとして かりに人  
けんとなり かく夫婦となりまいらせ  
しことこそはつかしけれ さりなから  
かたみに御らんし候へとて ひたりの  
わきよりはこをひとつとりいたし  
これを御身にまいらする あひかまへてくゝ  
このはこをあけさせ給ふなとて渡し  
けり あふものは かならずわかるゝとは

しりなから とゝかねて (めね) かくなん

日かすへてかきねし夜半のたひ衣

たちわかれつゝいつかきてみん

うら嶋 返哥に

別れ行うはの空なるからころも

ちきりふかくは又もきてみん

うら嶋太郎もたかひに名こりをおし

つゝ かくてあるへきことならねは かたみの

ものをとりもちて ふる里へこそかへり

けれ わすれもやらぬこしかた行す多の (第13紙)

ことゝもをおもひつゝけて はるかのなみち

をかへるとて 浦嶋太郎かくなん

かりそめにちきりし人のおもかけを

わすれもやらぬ身をいかゝせん

さてうらしまはとかくして故郷へかへり

てみれば しんせきたえて とらふす野へ

と成にけり うら嶋かしこを見て こはいか成

ことやらんとおもひ あるかたはらをみれば

柴のいほりのありけるに立より 物いはん

といひければ うちより八十はかりのおき

な出て たれ人にてわたり候そと申せば

うらしま申けるは 此ところに うらしま

の 行急はしろしめさぬかといひければ お

きな申やう いかなる人にてましますは

うらしまの行急をは 御たつね候やらん ぶ

しきにこそ候へ その浦嶋とやらんは  
はや七百年いせんのことゝ申つたへて

候と申ければ (第14紙)

(絵三) (第15紙)

太郎おほきにおとろき こはいかなるこ

とそとて あきれてそみたりける しはし

ありてうらしま ありのまゝにかたりけれ

は おきなきひてふしのおもひをなし な

みたをなかつて申けるやうは さいも あは

れの御事やな さらはそのうらしまのし

るしををしへまいらせん あれに見えて候

すこしたかきところこそつかなれ それに

ふるきせきたうのみえけるは その人の

ひやうしよのしるしとこそ申つたへて

さふらへとて ゆひをさしてそをしへける

太郎 なくく草ふかき露しけき野へを

わけ そのつかにむかひ なみたをなかし

てかくそつらねける

かりそめに出にしあとを来てみれば

とらふす野へと成そかなしき

さて 浦嶋太郎は一もとの松の木かけに

立より あきればとそみたりける 太郎思ふ

やう 亀かあたへし形見のはこ あひかまへて

あけさせ給ふなといひけれ共 今は何かせん

あけて見はやと思ひてみるこそくやしけれ

(第16紙)

此はこをあけてみれば ふしきやな 中  
よりむらさきの雲三筋のほりけり 是を  
見て たちまち三十五のよはひもかはり果  
にけり (第17紙)

〔絵四〕(第18紙)

とかくして うら嶋太郎は鶴になりて こ  
くうにとひのほりけるこそふしきなれ  
そもくこのうらしまかとしをかめかはか  
らひとして はこの中にたゝみいれに  
けり さてこそ七百年のよはひをたもち  
にけり さしもあけてみるなとかめか  
をしへけるに あけてみるこそくやしけ  
れ うらしま

君にあふよはうらしまか玉手筈

あけてくやしき我なみたかな

と哥にもよまれてこそさふらへ しやう  
あるものいつれもなさけをしらぬといふこと  
なし いはんや人けんの身として おんをみ  
ておんをしらぬは木石にたとへたり な  
さけふかきふうふは二世の契と申けるは  
まことにありかたき事共なり うら嶋太郎は  
鶴になりて 蓬萊の山にあひをなし  
亀はかうに三石のいはほをそなへ よろ  
つ代をへしとなり (第19紙)

〔絵五〕(第20紙)

さてこそ めてたきためしにも つるかめ  
をこそ申なれ たゝ人にはなさけあれ  
なさけある人は行すゑめてたきよしを  
申つたへたり 其後浦嶋太郎はたんこの  
くにに浦嶋の明神とあらはれ しゆしや  
うさいとし給へり 亀もおなしところに  
神とあらはれ 夫婦の明神となり給ふ  
めてたかりけるためしなり (第21紙)

浦しま

一卷 (所蔵番号 Jp.301)

紙数	横(寸)	幅(寸)	詞(行)
見返し	31.7	27.5	
第1紙	47.2		15
第2紙	48.0		19
第3紙	48.5	絵一	
第4紙	48.6		19
第5紙	5.5		
第6紙	42.4		16
第7紙	93.4	絵二	
第8紙	48.2		19
第9紙	26.9		11
第10紙	47.8		19
第11紙	49.3		20
第12紙	49.5		20
第13紙	49.3		20
第14紙	48.7		18
第15紙	48.0	絵三	
第16紙	48.5		19
第17紙	16.0		6
第18紙	48.2	絵四	
第19紙	47.7		19
第20紙	48.2	絵五	
第21紙	31.3		8
合計	941.2		

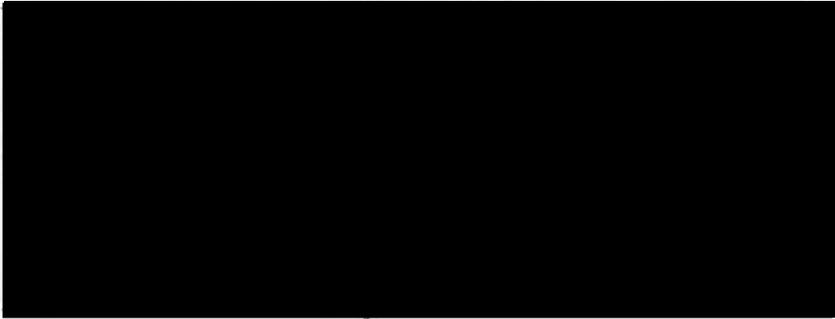
2



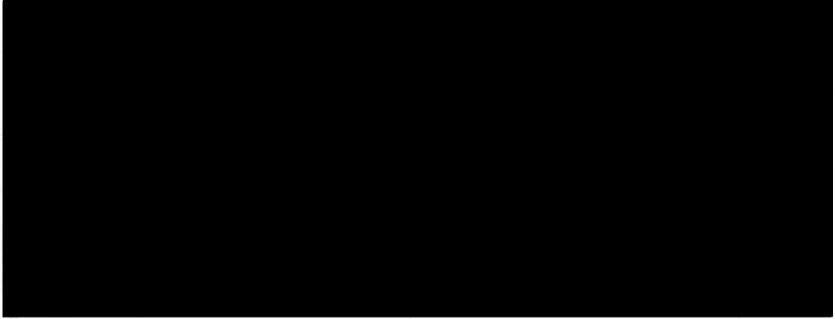
2

1

3



3



6

5

4



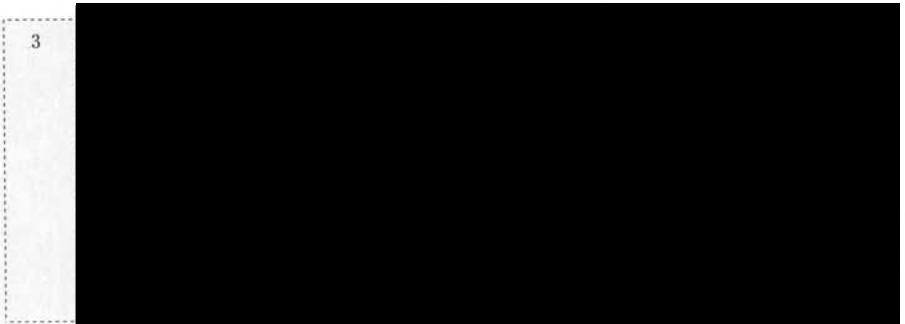
7



10

9

8



3

11

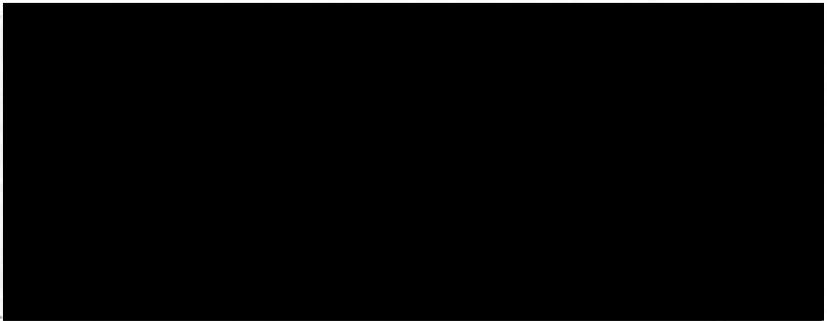


13

12

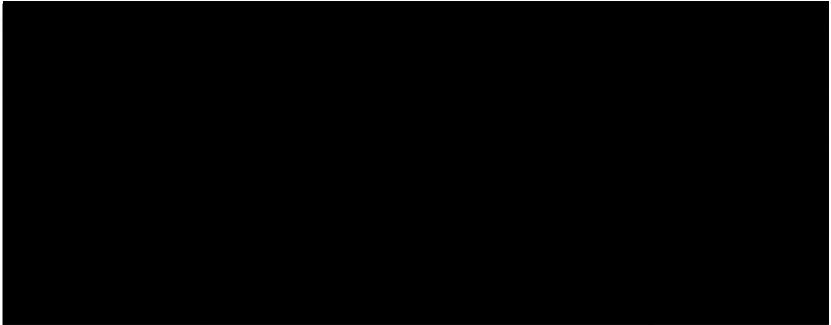


3



15

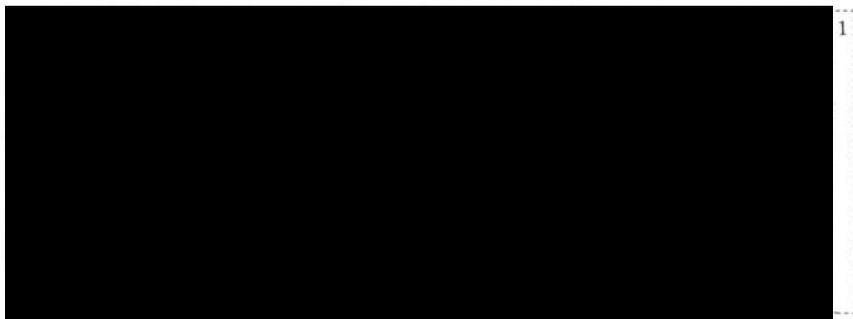
14



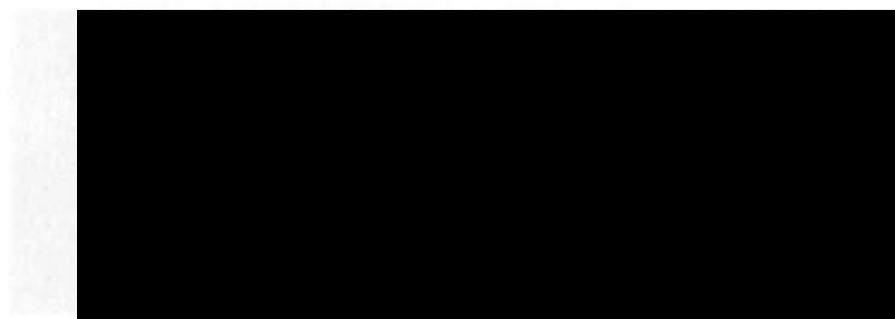
18

17

16



19



21

20



\*点線の囲み部分は、翻刻にはあるが、スライドを焼き付けるにあたって表出できなかった行数を示す。